
アンケート
高山 登

- Q: 「モノ派」とは？時期、作家の方々、作品などの共通性。
- A: 西洋モダニズムからの脱却 * インスタレーション * 一過性自己(個)と社会(世界)との関係性を元素的な物質と場の関わり合いを通して見つめ直した。1968年から枕木を制作始めた。1969年ごろから榎倉氏と仕事を始め70年戸塚スペース→点展→白州フェスティバルへと移行していった。
- Q: 70年代世界の中でのモノ派、ミニマルアート、コンセプチュアルアート、アルテポーベラ、などとの関連性
- A: 同時代現象として見る事ができるが、日本というあいまいな場の中で現実を見つめるという方法を選んだ。私はキーンホルツ、ラインハート、ジャスパージョーンズ、シュビッターズから学ぶものが多かった。
- Q: 「具体」との関連性世界的な位置づけ
- A: 西洋に対し東洋を意識し常に外からの影響化に置かれている美術に対し極地的美術を考え、アジアが世界に対し位置づけられ日本はアジアの中でどのように位置づけられているかを考えざるをえなかった。
- Q: なぜ今「モノ派」が見直されているのか？
- A: 作品と環境という関係があるとすれば作品は環境の一部であり、また、環境は作品の一部であるという考え方(生態学的一元論)に関心が向いているからではないか。
- Q: 「モノ派」に対する批判について
- A: モノ派というのは時代的共通項であるかのように見えるがもともとそんなものではなかった。共通するのは挫折感ではなかったか？未分化な全体像として捕らえ直す必要がある。
- Q: 再制作について
- A: 制作そのものが、場と物質との関係性の中で成立するという考え方で制作していたので再制作は場自体が問はれるものでなければ、異質なものとして(彫刻)として見えてしまう可能性がある。場、空間との関係において成り立つアートシステムなのであって作品物体だけで成り立たない。作品が空間を作るのではなくその場所、空間とある特種な物質との出会い方、システムが作品であって彫刻のような自立ではない。合えて言えば空間の自立の自立であるという考え方に私の作品は基づいている。
- Q: その他
- A: 当時思い出すと作品とはならない枕木を造る事に思いを走らせ、人柱としての枕木を構成(インスタレーション)し、一過性のものとして作品はある場所との関係で生まれ出てくると思っていた。

* 尚、他の出品作家の方々にもアンケートをお願い致しました。